

# AR を活用した初等中等外国語教育における授業観察の一考察 ～アクティブ・ラーニングと効果的なフィードバック～

喜多容子\*

本研究では、初等中等外国語教育における授業観察において、「英語情報 AR」を導入することにより、学生の授業観察や意見交換をする過程が、どのように深い学びへとつながるかを考察するとともに、学生の学習への気づきに対する効果的なフィードバックの方法について Forms の活用を模索することを目的とした。

[キーワード：ICT, AR アプリ, アクティブ・ラーニング, フィードバック, Forms]

## 1. はじめに

学習指導要領が改訂され、本年度より小学校では移行措置期間が開始された。改訂の基本方針には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることが明示されている（文部科学省，2018a）。特に、子どもたちがこれからの時代に対応できる資質・能力を身につけ生涯学び続けることができるように「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進するという視点で、「アクティブ・ラーニング」が提言されている。そして、授業改善の中で情報活用能力の育成を図るため、コンピューターなどの情報手段を適切に活用した学習活動の充実を図ることが明記されている。ここでは、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ることが期待されている。

また、今回の改訂では、外国語教育の充実が主な改善事項の一つに挙げられ、これまでの成果と課題を踏まえた改革が行われた。小学校で中学年に外国語学習が導入され、高学年には外国語科が設定された。特に、小・中学校の接続を重視し学びの連続性を意識した指導をすることが、重要な改善点として提起されている（文部科学省，2018b）。学びの連続性については、従来の小・中連携から、小・中・高連携へと広げる必要性が唱えられている。

さて、外国語学習における ICT 機器を活用した授業実践例は、電子黒板をはじめとしてタブレット活用など多種多様な発表がなされている。近年は、スマートフォンにダウンロードされた英語情報動画配信専用アプリを活用し、初等中等教育における授業観察をすることも可能となっている。

将来教員を目指す本学学生にとって、最新の優れた授業実践例を観察し、自らの将来の授業実践への

示唆を得ることは、大変有益であると思われる。また、学生が協働して授業観察し意見交換をすることは、アクティブ・ラーニングの視点からも、効果的である（中嶋・直山・久保野，2017）。

教員養成を目指す本学では、従来の講義形式から脱却した、学生が主体的に学ぶアクティブ・ラーニングが実施されていると推察する。また、各コースとも2～4週間の教育実習期間が設定されており、講義で学んだ理論を踏まえて実践的な取り組みを行うことができるカリキュラムとなっている。言語系コース（英語）では、学部の各学年に初等中等教科教育実践が設定され、マイクロティーチングなど学生が授業実践を行い、その過程でフィードバックを得る機会が多く設けられている。

このように、大学における講義でマイクロティーチングをはじめとする実践授業の機会が多く設けられているとはいえ、学生にとって実際の小・中・高等学校における教育現場での研究授業・授業発表会に参加し、最新の指導方法について学ぶことは必須であると考えられる。本校学生には、毎年6月に鳴門教育大学附属中学校で開催される教育研究発表会に参加し、各教科の研究授業を参観する機会が設けられている。

しかしながら、この機会を除き、県内各地・全国で開催されている研究授業・授業発表会に参加することは、時間的・物理的にまだまだ困難であると思われる。小・中・高等学校における授業実践例の教材なども販売されているが、いずれも学生にとって安価とは言い難く、またその多くは未だDVD教材であることも難点である。初等中等教科教育実践の講義でも、DVD教材を使用し、授業観察は実施したが、学生にとっては受動的な学習形態に陥りがちである。学生たちが能動的に学ぶスタイルの授業観察、つまり自ら内容を選択し授業観察に取り組むことができる ICT 補助教材に関する情報提供の必要性を強く感

\* 鳴門教育大学 大学院 学校教育学部

じる。現在、普及しているスマートフォンを効果的に活用し、学生が自分たちのペースで、しかも手軽に、小・中・高校の最新の外国語学習の様子を観察できる手段が必要であると考える。

## 2. 目的

本研究では、初等中等英語科教育における授業観察において、「英語情報 AR」アプリを導入することにより、学生の授業観察や意見交換をする過程が、どのように深い学びへとつながるかを考察するとともに、学生の「学習への気づき・振り返り」に対する効果的なフィードバックの方法について Forms の活用を模索することを目的とする。

## 3. 方法

### 3.1 対象

本学の英語科教育コースに在籍する学部 3 回生 8 名を研究対象とする。人数構成は、小学校英語科教育専修学生 4 名、中学校英語科教育専修学生 4 名である。8 名とも、9 月に、鳴門教育大学附属小学校・中学校での教育実習(1 か月間)を終えており、外国語学習の授業実践を経験している。

### 3.2 実施内容

対象となる 8 名の学生は、英語科教育論における講義にて、外国語教育における小中高連携の現状についての認識を深めている。本研究における実践は、3 回に分け行うこととする。第 1 回では、小学校英語科教育専修学生と中学校英語科教育専修学生がペアとなり協働学習で、ICT を活用した教材を作成し、全体でデモンストレーションを行う。その後、今まで取り組んできた模擬授業や自らの教育実習での成功例や浮かび上がった問題点などについて、ペアで話し合い、全体で共有する。

第 2 回・第 3 回の実践では、英語情報誌とそれに対応した「英語情報 AR」アプリを使い、授業観察と意見交換を行わせた。授業観察は、タブレットまたはスマートフォンにダウンロードした AR アプリを活用した。第一段階は、全体で「英語情報 AR」アプリの活用方法を確認した後、授業観察を行わせた(図 1)。

第二段階は、「英語情報 AR」アプリの活用方法を理解させた後、ペアでの協働学習へと移行した。ここでは、ペアで、小・中・高校の模擬授業の中から視聴希望の画像を選ばせ、「英語情報 AR」アプリでスキャン及びダウンロードを行わせ、自分たちの

ペースで視聴させた。(図 2)。この際、以下の 2 点に配慮して視聴することを伝えた。配慮事項の 1 点目は、前時に共有した、今まで取り組んできた模擬授業や自らの教育実習で疑問点や問題点などについて、それらの解決策となる授業場面との出会いなどを考慮したうえで、視聴することである。配慮事項の 2 点目は、今後の自らの授業実践において、活用及び応用してみたい活動例などを押さえたうえで視聴することである。授業観察の過程では、必要に応じ、ペアやグループで意見交換を行うことも伝えた。

### 3.3 教材について

今回の実践で使用使用する英語情報誌は、全国の学校に年数回、無料で配布されており、最新の英語教育情報や全国の小・中・高校の英語科模擬授業が掲載されている(日本英語検定協会, 2017)。そして、授業担当者の本時の模擬授業でのねらいや、それまでの取り組み、さらに文部科学省教科調査官からの授業に関するコメントなども記載されており、様々な角度から英語科教育についての最新の情報を入手できる教材となっている。

掲載される授業実践は、全国の小・中・高校から抽出された様々な年代の英語科教員による独自性の



図 1 「英語情報 AR」活用した授業観察の様子(全体)



図 2 「英語情報 AR」活用した授業観察の様子(協働学習)

ある取り組みである。実際の 1 コマの模擬授業は、小学校 45 分間、中学校・高等学校は 50 分間の授業構成であるが、これをそれぞれ 8 つの授業場面に分け、ビデオクリップが作成されている。模擬授業のビデオクリップはハイライトの部分のみが収録されており、それぞれ 1~3 分程度となっている。学生にとって、短時間で視聴できる長さとなっている。

紙面上の写真が AR 対応になっており、「英語情報 AR」アプリをかざすと、授業のテクニックを動画で見ることができるシステムとなっている(図 3)。また、画面をスキャンしダウンロードしておく、再度視聴することが可能である。

## 4. 結果

### 4.1 授業観察と意見交換について

学生が「英語情報 AR」を活用し、模擬授業を視聴する中で、しばしば画面を静止させ、授業内容について、ペアまたはグループで活発に意見交換を行う様子が見られた。AR で視聴する模擬授業ビデオクリップは、それぞれ短いものではあるが、英語科教員として必要な基本的な授業のテクニックからはじまり、コミュニケーション活動を重視した授業の展開について、ポイントを踏まえて学び取ることができたようである。特に、自らの教育実習での授業実践を踏まえ、そこから浮かび上がった問題点とそれに対する対応策について、多様な事例を参考に、話し合う機会となり得たことが、「学習への気づき・振り返り」からも伺えた。



図 3 「英語情報 AR」の活用の様子

### 4.2 Forms を活用したフィードバックについて

協働学習での意見交換を全体で共有するとともに、学生の学習への気づきに対する効果的なフィードバックを行うために、講義終了後に、各自の振り返りについて Forms を活用し、提出することを伝えた。Forms の QR コードは、学生にメールで送信した。半数の学生が、その場で Forms の QR コードを読み取り、即時に学びの振り返りを記入する様子が見られた。以下は、学生の振り返りについて記載したものである。

#### (1) 学生 A

英語情報 AR では、アプリを使って小・中・高の授業を視聴した。今は、こんなに手軽にさまざまな授業が見られるんだと驚いた。たくさんの先生の授業のパターンが見られるので、マイクロティーチングを作る時のヒントにしたい。

#### (2) 学生 B

AR アプリでは、紙媒体で文章を読みながら映像も見られるため、読んだ内容を見ることで二段階の理解ができるのがよいと思った。映像では授業の雰囲気や子どもの反応も見られるので、授業を行うという面からも勉強になると感じた。履歴に残るため、後から見返せるという点も魅力的だ。

#### (3) 学生 C

まず、それぞれのペアが作った ICT 教材を見て、自分たちの考えになかったものもあり、参考になった。せっかく ICT 教材を活用するのであれば、しっかりと有効活用できるようにしたい。また、ICT は動作がうまくいかないこともあると改めて実感したので、そのような点にも気をつけられればと思った。

英語情報 AR のアプリを使って、校種別の授業観察と比較をした。わたしのペアでは、話す活動について主に比べたが、比較的、どの校種でもしっかり話すことができている印象だった。また教師も英語のみで伝えようとしており、今後このようなことが求められるのだと感じた。そして、そのような取り組みが小学校からはじまり、高校まで一貫して続いているということは、英語に親しみ、英語を学ぶという点で必須だと考えた。これからこのアプリを活かすなどして、さまざまな授業を見て参考にして、わたしもしっかりと授業ができるようにしたいと思う。

#### (4) 学生 D

各グループの ICT を使った教材をマイクロティーチングで見せ合って、講義を楽しく受けることがで

きた。次は、コミュニケーション活動に転換していくにはどうすればいいのか考えていきたいと思う。

「英語情報 AR」アプリを利用し、先生方の授業の動画を見た。「英語情報 AR」アプリを活用すると、簡単に他の先生方の授業をみることができ環境になるため、忙しい教職員でも簡単に勉強を進められると感じた。将来、教師になった時には、積極的に授業実践のヒントとして活用していきたいと感じた。

#### (5) 学生 E

まず「英語情報 AR」アプリを活用して感じたことは、このような方法で見ることができるとは知らなかったのだから、参考になった。実際の授業の映像をみることは、授業に対するイメージや案もうかびやすくなると思うので、今後も参考にしてみたい。

#### (6) 学生 F

いろいろな授業場面を観察して、英語では、コミュニケーション活動が重視され、児童・生徒同士の協働学習や自分の考えをいかに相手に上手く使えることができることが大切かということについて考えることができた。参考にできるアクティビティーがたくさんあった。

#### (7) 学生 G

自分が教育実習で模擬授業をしたときに、授業の内容で様々な疑問点があったが、今日、英語情報 ARでいろいろな授業の仕方をみて、たくさんのヒントをもらえたような気がする。手軽に授業観察ができるので、今後も使ってみたい。

#### (8) 学生 H

自分は中学校教員を目指しているのだから、授業の導入や展開のテクニックをプロの先生方の授業から学ぶことができた。今後模擬授業をする時の参考にしたい。特に、スマホで簡単に見られることがとても便利だと思った。他に授業の様子を見られるアプリなどがあれば、是非知りたい。ただ、Wi-Fi 下で使わないとデータ量を沢山消費してしまうことが問題だと思った。

## 5. まとめと今後の課題

学生は、協働学習を進める中で、自分たちの授業実践と比較し、授業の様々なテクニックについて意見交換をすることができていた。学生のほとんどが自分たちの専門とする分野の授業以外は観察する機会に恵まれなかった様子で、異校種の授業実践の授

業観察に興味を示した。「高校の授業で、英語で討論はこのように行うのか。」などの感想も出された。これは、近年、小・中連携さらに小・中・高連携の重要性が指摘されていることを考慮すると、今回の取り組みが大変効果的であることを示すものである。

また、学生から Forms を通して提出された「学習への気づき・振り返り」を考察すると、自らの授業実践を踏まえ、今後実践してみたい活動や様々な示唆を得たことが伺える。ほぼ全員の学生が、今後も各自で「英語情報 AR」を活用し、授業観察を行いたいと感想を述べている。

このように、学生が、様々な事例を参考に、自らの視点で、自分自身の授業実践や取り組みを振り返る過程こそが、真のアクティブ・ラーニングとなり得ると考える。その一手段として「英語情報 AR」アプリの活用は効果的であったと思われる。

ただ、「英語情報 AR」アプリを活用できる英語情報誌が年数回しか配布されないことは、今後対応すべき課題の一つとなっている。小・中・高校の最新の授業を、学生が身近なものとして観察することができる機会を提供するには、まだまだ多くの課題が残されていることを示唆している。英語科教育においては、多種多様な学習アプリケーションが提供されているが、使用においてセキュリティー面の懸念も予想される。また、実用性のある学習アプリケーションだけを選び出すことに、膨大な時間を費やすことがないように配慮することも重要である。

それ故に、学生が自分たちのペースで、しかも手軽に、小・中・高校の最新の外国語学習の様子を観察できる最も効果的な手段について、今後も検討する必要性を強く感じている。

## 謝辞

本研究に対して、ご示唆をいただきました鳴門教育大学情報基盤センターの曾根直人准教授及び研究協力をいただいた皆様にお礼を申し上げます。

## 参考文献

- 中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史(2017) プロ教師に学ぶ真のアクティブ・ラーニング, 開隆堂.
- 日本英語検定協会(2017) 英語情報 2017 春号, 日本英語検定協会.
- 文部科学省(2018a) 中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説外国語編, 開隆堂.
- 文部科学省(2018b) 小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説外国語活動・外国語編, 開隆堂.